

2ー9 対旋律（オブリガート） の作り方

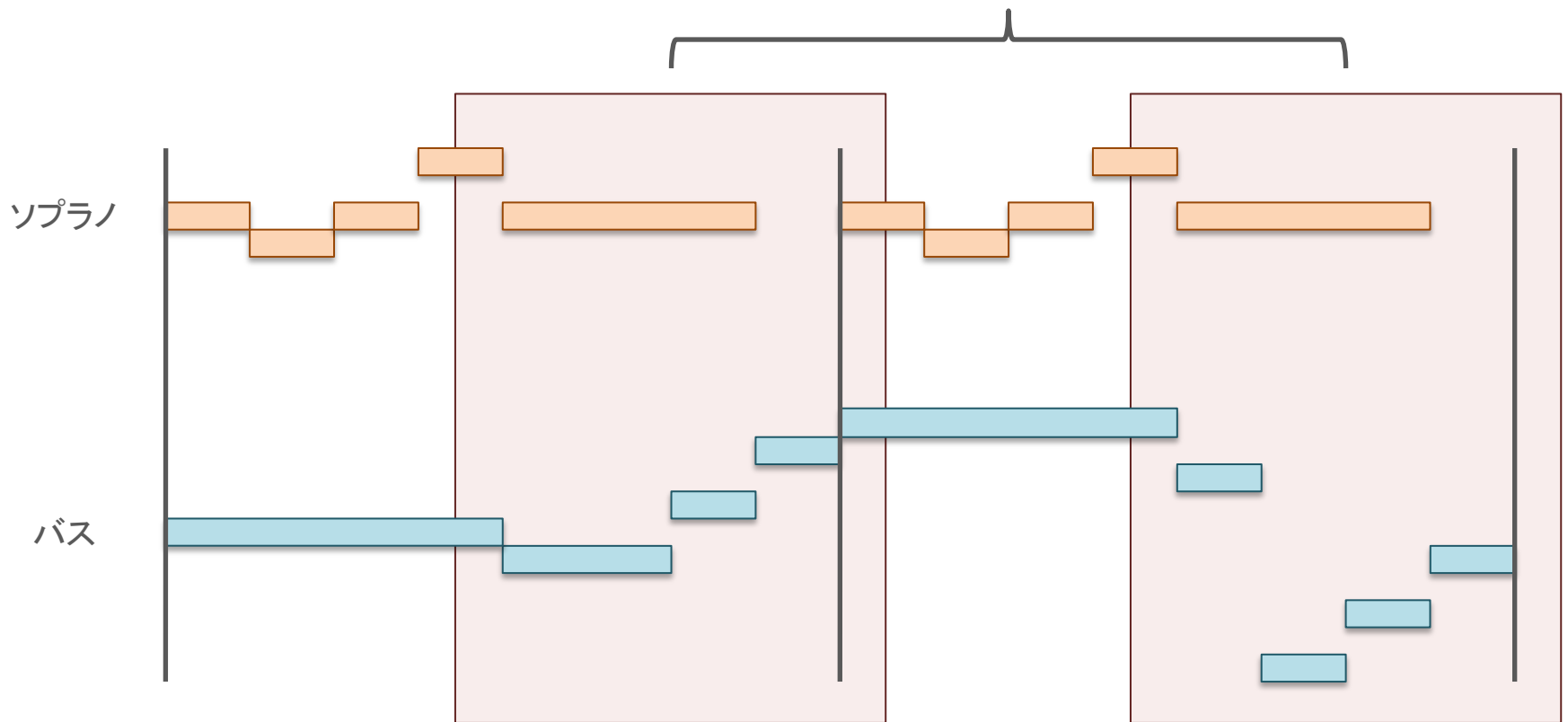
対旋律の基本

対旋律は、あくまで主旋律(メインメロディ)に対する補佐的なメロディ。したがって、対旋律を作る上で何よりも重要なポイントは「主旋律の邪魔をしないこと」。そのためには、以下の3点を意識しよう。

- ① 主旋律の間の手をとる
- ② 主旋律と同時に動く場合は、フォーカス度を下げる
- ③ 先に主旋律に出番をゆずる

① 主旋律の間の手をとる

ソプラノの隙間を縫うようにバスを動かす



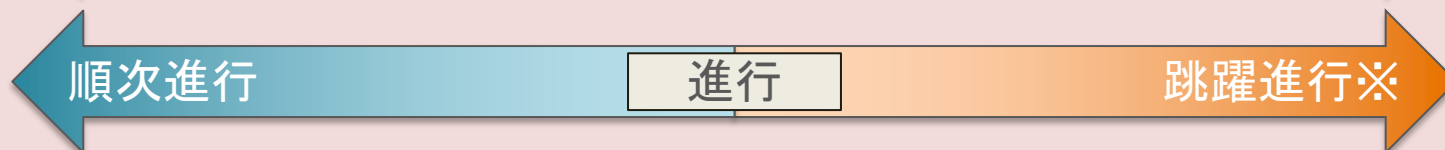
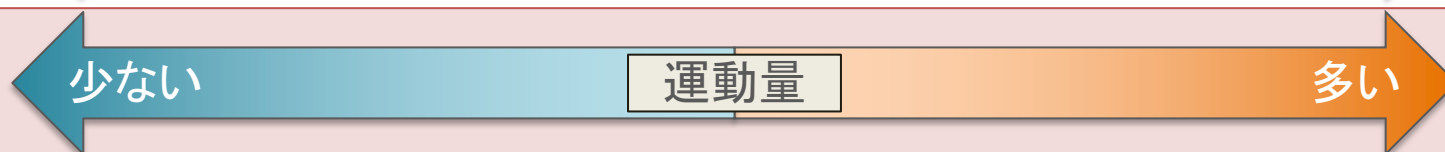
② 主旋律と同時に動く場合は、フォーカス度を下げる

どうしても主旋律と同時に動く必要がある場合は、主役である主旋律よりも目立たないようフォーカス度を下げる。中でも、以下の3つの手段が有効。

- A) 音域をすみわけ
- B) 運動量を控えめにする
- C) フォーカス度の低い進行を選ぶ

フォーカス度と音楽的要素の関係性

低い ← フォーカス度 → 高い



ここが大事！！

※トライアドの構成音が連続するとフォーカス度は下がるので注意。

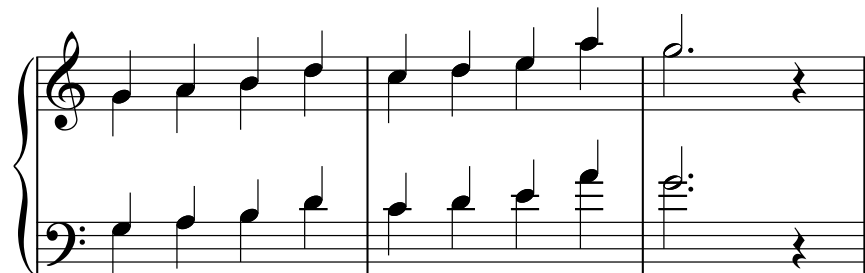
A) 音域をすみわけする

主旋律よりも音域の低いパートで対旋律をとる場合はそこまで邪魔にならない。したがって、ViolaやCelloを主体とした中低域の対旋律ならば邪魔になりにくなる。



B) 運動量を控えめにする

四分音符の動きはそこまでフォーカス度を高めない。

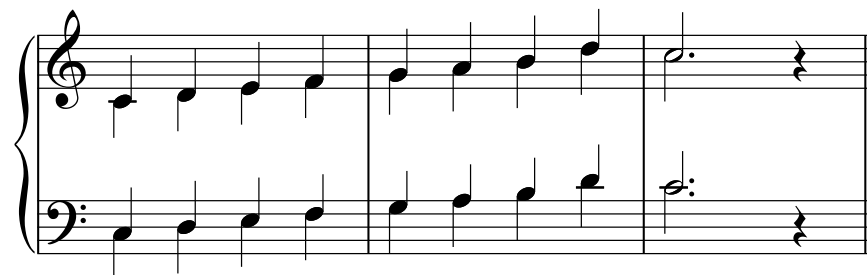


付点四分音符＋八分音符という組み合わせも悪くない。

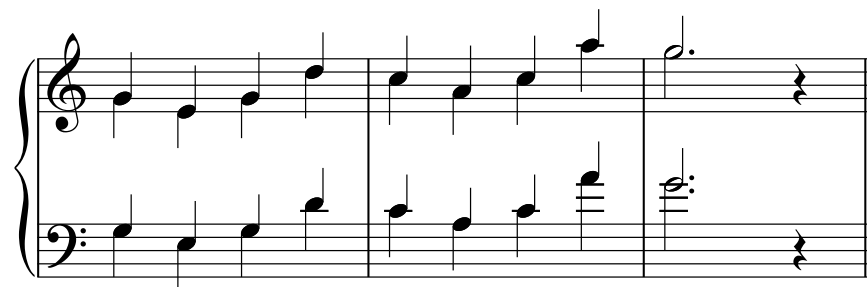


C) フォーカス度の低い進行を選ぶ

順次進行に徹する。

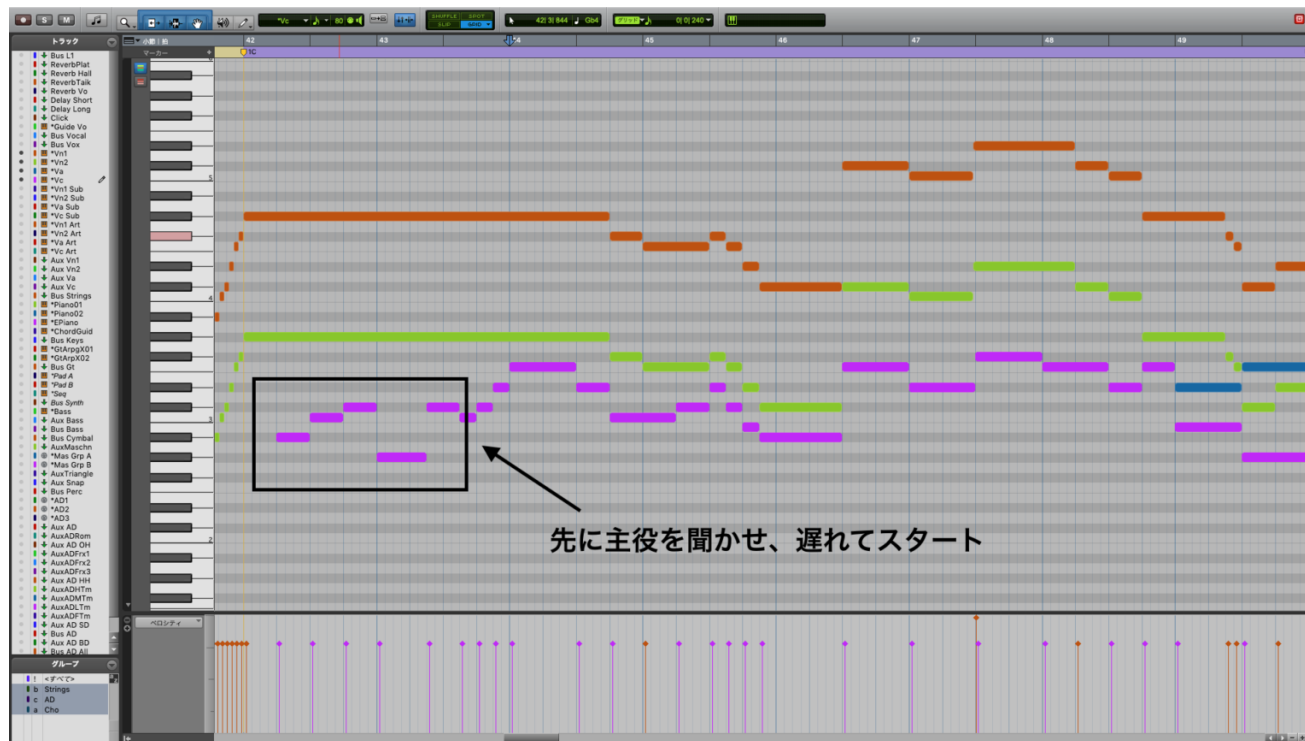


アルペジオでコードをなぞる。



③ 先に主旋律に出番をゆずる

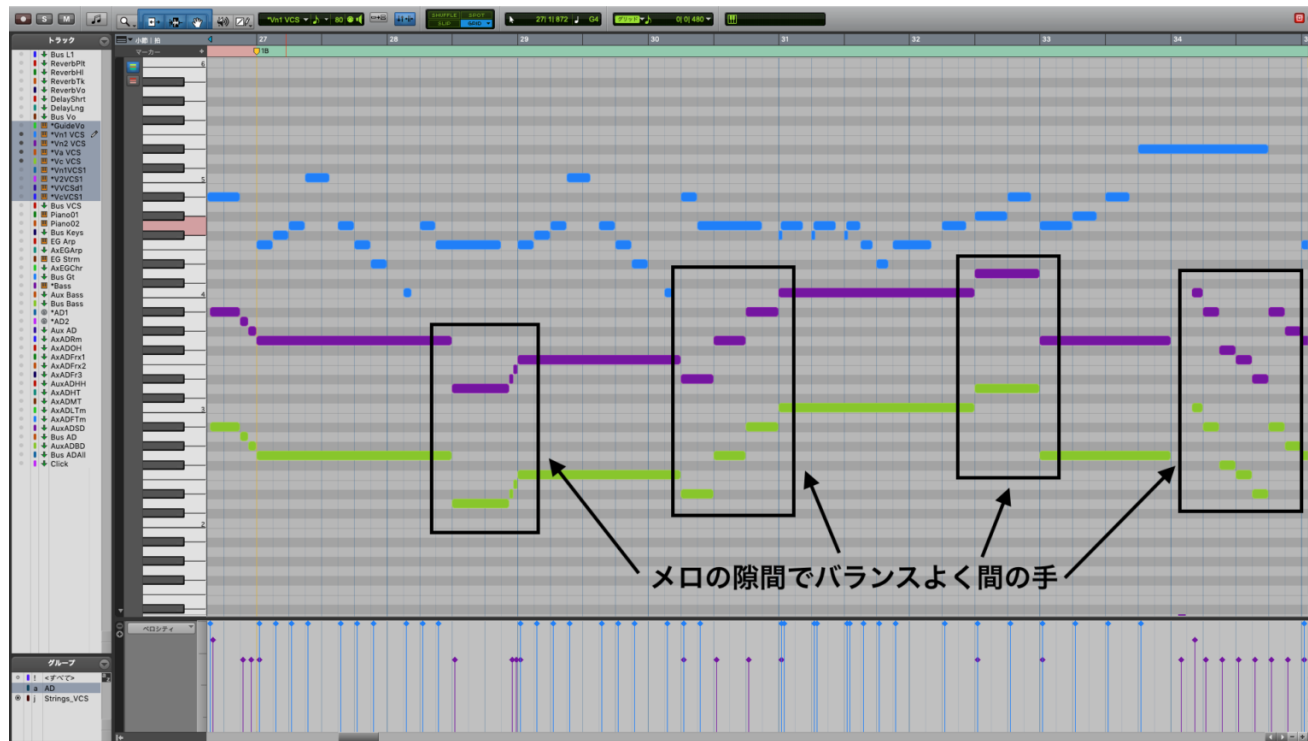
先に主旋律を聞かせることで、リスナーのフォーカスは自然と主旋律にロックされる。その後対旋律を演奏することで主旋律へのフォーカスを奪う恐れが少なくなる。



3つの対旋律タイプ

タイプ①: バランスタイプ

主旋律の合間に適度に間の手を入れていくこのタイプは、あらゆるシーンで使える万能型。対旋律が1本だけの場合に適しているため、ユニゾン型に最適。



タイプ②: 引き立てタイプ

ほぼ白玉に徹し、主旋律が落ち着いたときのみ間の手を入れる型。デュアルオブ
リガート型の上声部など、複数の対旋律を扱う際に重宝する。



タイプ③:レディファーストタイプ

先に主旋律に出番を譲りつつ、自身も華やかなオブリガートを演奏するタイプ。対旋律にもがつつり動きを出したい！という場合に非常に重宝する。

